

自分らしく、ありのままに。

田舎暮らしを楽しもう

西日本新聞

くらしの情報誌

2007

私たちの
田舎暮らしを
紹介します。

「田舎暮らし」体験ルポ

海あり、緑あり、
笑顔あり。

伊王島ショートステイで
島国ライフを満喫。

創刊130周年



これだけはやっておこう
田舎暮らし計画

DIYで自分流にアレンジ
世界にひとつの手作り家具

香りも味も、やっぱり違う
手作りパン&ジャム

西日本新聞

自分らしく、ありのままに

私たちの 田舎暮らしを 紹介します。



大自然に恵まれた九州。ちょっと市街を離れば田んぼや畑、放牧地などの景観を望むことができます。その緑豊かな九州の地に魅せられて、自然に、ありのまま、生活していくことを決意した二つの家族。ビルに囲まれ、がむしゃらに働いてきた日々から、緑の中でゆったり生活する日々へ。もちろん農業経験なんてない、真っさらな状態からのスタート。それでも、今、楽しく健康的な毎日を送っています。そんな二家族から、農業生活を始める前から今日に至るまでや、これからの展望など、農業ライフのすてきな話を伺うことができました。



型にはまらず等身大 楽しく農業することが いちばん大切なこと

- 1 耕太さんが取り付けけた暖炉を冬は愛用中。室内は天井が高く、木のぬくもりを感じます
- 2 近所の農家と共同使用している牧草地で放牧している赤牛。阿蘇の自然が育てた健康ビーフ
- 3 今は見る機会が減ったこづみ。刈った稲を乾かすために十字型にしてつんでいきます
- 4 家の前にある畑は桔平くと連蔵くんにとって、自然にふれ合える身近な場所
- 5 セリ市では子牛を出荷することも。出荷と生産のサイクルをうまくまわすことが、農業を営む上で重要な技術



大自然のど真ん中

南阿蘇の山々と田園風景を眺める大自然の中の集落に大津一家の住まいがあります。大きなこいのほり竿2本を目印に敷地へ入っていくと、愛犬ミミちゃんが熱烈歓迎。周りを見ると、山積みされた薪と野菜畑、そして築120年の古民家がある風景。どこか、懐かしさを感じます。

家の中に入ると、大きな部屋をふすまで仕切って四つの空間を作り出す、昔ながらの「田の字の家」づくり。薪で温める暖炉や、アンティークのシーリングファンもあり何ともオシャレです。この一つ屋根の下で田舎暮らし、農業暮らしを満喫しているのが大津耕太さん、愛梨さん夫妻と

双子の桔平くん、連蔵くん。4人でぎやかに暮らしています。

楽しい農業生活

この地に移り住んで約4年。耕太さんのおじさん

が同じ南阿蘇で専業農業をやっており、小さいころによく遊びに来ては土にふれたり、川へ行ったり。田舎の生活になじむ中、気づけば「いつかこんな生活をしてみたいなあ」という漠然とした思いが生まれたそうです。

大学では農村景観や環境を研究し、その後のアルバイトやドイツへの留学、帰国後の就職でも農村に関する研究をされていた耕太さん。しかし都会での研究の日々に満足できない状況が続いたようです。「研究ばかりの生活に気づいたら疑問を持つようになりましたね。農村は大切、素晴らしいと言っても自分は土を踏まないし触らない。何か違うなと思っていました」と当時のことを振り返ります。東京での日々を



私たちの
田舎暮らしを
紹介します。



打破するために、南阿蘇へ移住を決意し、現在の生活を始めたそうです。

家も畑も先達者もいるといった恵まれた基盤があったものの、農業は初体験。それでも「思っていたよりも楽しいですね」と好印象。現在は「おあしす米」という有機無農薬のお米と野菜作り、赤牛の飼育を行っています。

生活習慣は東京にいた時とは違い朝早いですが、いいことは山ほどあるとか。自分のペースですずめることができる、やることは自分で決められるなど……ストレスは減ったそう。そして何より、家族との時間を大切にできるのが農業生活を始めてよかったと感じることだそうです。しかし、「自分で決めて何でもする生活には大きな責任がついてきますけどね」と楽しいだけでは成り立たない厳しさもあるようです。

現在、地域の人に支えられ農業や子育てに取り組む毎日。今、なくなりつつある地域の交流もすっかり

根付いているのが田舎暮らしの素晴らしいところでもあります。

次への挑戦

まだまだ若い夫妻はチャレンジ精神が旺盛で、飼育している赤牛を繁殖させてマーケットを広げていくことにも意欲的です。また愛梨さんは得意な料理を生かし、赤牛を使った料理の勉強が続いています。他に「若い人が見て、農業もいいねと思ってもらえるような何かができたらいい」と農業に興味がある大学の後輩に、ここでの生活を体験する場を提供することも。

「農業はこうあるべきだ」ではなくて、自然体で楽しむことが一番。農業と縁のない地域で生まれても食は生きる上で欠かせないものだから、興味がある人は多いはず」と愛梨さん。「農業をしている人がもつとつと楽しさをアピールするのが必要だと思います」とのこと。これから、大津夫妻の挑戦はもちろん、桔平くんと連蔵くんの成長など期待や楽しみが盛りだくさんの南阿蘇の一家です。